

ともにいきる

鳥取県 梅翁寺副住職 倉瀧英信

今朝はともにいきるというお話です。

2月のある晴れた日、親友のお墓参りに行きました。

彼と親しくなったのは高校三年生の夏です。大学受験の講座を受講した時、内気な私に彼は積極的に話しかけて、くれたのでした。彼は明るく誰からも信頼される好青年でした。

その親友が若くして病気でこの世を去ってまもなく十年。私は毎年お墓参りをすることにしています。その日も墓地からは雪を抱いた大山が見え、まるですぐ近くに彼がいるような気がしました。

お参りを済ませ、親友の家を訪ねました。「ごめんください。」と声をかけると、「はいっ。」という元気な声とともに男の子が出てきました。彼の息子さんです。親友の面影の残る姿に感極まるものがありました。私が帰ろうとすると、親友のご両親の姿が見えました。ごあいさつをするとお母さんが「いつも息子のこと、覚えていてくれてありがとうございます。」と言われました。その時彼の姿が頭の中をよぎりました。

「何もないけど。」とお母さんが収穫したばかりの大根と白菜を渡して下さいました。立派に育った大根と白菜は親友の命と同じようにずしりと重く感じました。私には彼が「俺の分までしっかり生きろよ」と励ましてくれているように思えました。その日の出来事を通して彼がすばらしい家族と地域によって育まれていたことを再確認できました。